いま伝えたい

細菌戦のはなし

隠された歴史を照らす

著者◉森　正孝

明石書店

森　正孝(もり　まさたか)
1941年東京生まれ。静岡大学文理学部経済学科卒業。日本交通公社勤務を経て、現在、公立中学校教員。映画『侵略』上映委員会代表、日本軍による細菌戦の歴史事実を明らかにする会代表委員・事務局長。中国帰還者連絡会賛助会員。
[映像作品]
『語られなかった戦争・侵略パートⅠ』(50分)、『侵略パートⅢ・南京』(55分)、『侵略パートⅣ・中国の大地は忘れない』(42分)、『侵略パートⅤ・細菌戦部隊731』(95分、60分)、『侵略パートⅥ・細菌戦被害の人々』(58分)、『南京大虐殺の真相を追って・消えた14777人』(32分)、『侵略原史・台湾支配50年』(60分) 等。
[著書]
『中国側史料・日本の中国侵略』(共編、明石書店)、『中国侵略と７３１部隊の細菌戦』(共著、明石書店)、『細菌戦が中国人民にもたらしたもの』(共著、明石書店)、『時効なき戦争責任』(共著、緑風出版)、『中国の大地は忘れない』(社会評論社) 等。

いま伝えたい
細菌戦のはなし
隠された歴史を照らす

定価はカバーに表示してあります。

1998年11月10日　第１刷発行

著　者　© 森　正　孝
発行者　石　井　昭　男
発行所　株式会社 明　石　書　店
〒113　東京都文京区湯島2-14-11
電話 03 (5818) 1171　FAX 03 (5818) 1174
振替 00100-7-24505

組版／株式会社アート　印刷／株式会社プロスト　製本／難波製本

さし絵　鈴木真理子・飯田昭二

ISBN4-7503-1090-5

云えたい

細菌戦のはなし

隠された歴史を照らす

著者◉森　正孝

明石書店

いま伝えたい

細菌戦のはなし——隠された歴史を照らす◎目次

序章　鬼の顔が見てみたい……7

第一章　惨劇の村・崇山村……31

1　猛烈なペスト流行　34

2　一六四四部隊が崇山村へ侵入　51

第二章　細菌戦はどのように行なわれたか……73

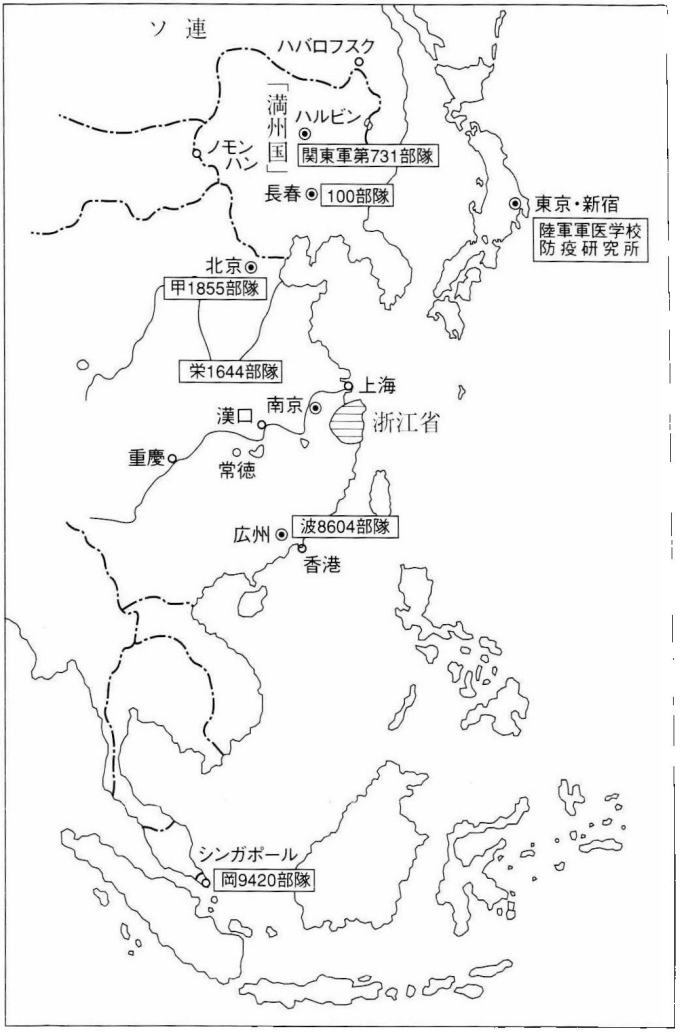
1　細菌戦部隊の成立　74

2　細菌戦の実施　87

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbo

第三章　私は細菌戦に参加した……115
1　ペストノミが逃げだし大騒動　116
2　杭州の飛行場で菌液を積んだ　131
3　細菌撒布のパイロットだった　143
4　中国軍兵舎の床下へペストノミをばら撒いた　153
第四章　細菌戦と中国の人びと……163
1　日本人に会う「二つの条件」　164
2　細菌戦被害者たちは語る　178
あとがき

六つの細菌戦部隊と防疫研究所



浙江省関係地図

江蘇省
太湖
上海市
杭州湾
安徽省
杭州市
筧橋
紹興市
寧波市
浙
赣
鉄
道
義烏
東陽市
崇山村
塔下州村
龍游
金華市
江西省
常山
衢州市
(衢県)
玉山
江山
横峰
上饒
(広信)
広豊
浙江省
翁垟
麗水
雲和
温州
福建省

序章　鬼の顔が見てみたい

その村との出会い

その村のことを知ったのは、もう一〇年も前のことになります。

そのころから七三一部隊のことを調べていた私は、その夏、中国東北部のハルビン市平房（ピンファン）にある七三一部隊跡地を訪れていました。そこで古くからの友人に会ったのです。その人の名は郭成周さん。

郭さんは中国軍事科学院の学者で、やはり七三一部隊のことを中国人の立場から調べていました。彼が「これを読んでごらんなさい。七三一部隊のもっとも重大な犯罪事実がわかると思いますよ」と言って一冊の本を私に手渡したのでした。本の

名は『日本侵略軍在中国的暴行』。

そこにその村のことが書かれてあったのです。

「……七三一部隊の派遣隊は南京一六四四部隊と共同して浙贛鉄道沿線の金華（きんか）、衢州（くしゅう）、玉山（ぎょくざん）一帯で細菌戦を行なった。そのためその村は甚大な被害を受けた。村の三八〇戸、三八〇人以上の村人がペストで死亡。約三〇戸の家族が死に絶えた……」

その村のことはたった二行ていどの短い説明でしたが、私にとっては大変衝撃的な出会いとなりました。

というのは、私にとって七三一部隊についての関心は、平房の七三一部隊施設のなかで行なわれたさまざまな人体実験や生体解剖についてでした。大変残酷なそれらの事実が、七三一部隊の犯罪のすべてだと思っていたのです。

私に限ったことではなく、当時七三一部隊を扱っていたジャーナリストや研究者の大半もそこに関心が集中していました。生きた人間に細菌を植えつけて発病状態を調べ、生体のまま解剖する、というとうてい人間のしわざとは思えない行為がく

り広げられていた（その事実が広く知られることになったのは一九八一年に出版された『悪魔の飽食』森村誠一著、がきっかけです）のですから、そこへ関心が集中することは無理からぬことでした。

ところが、七三一部隊にはもう一つ「もっとも重大な犯罪」があったことを、その本から知らされたのでした。細菌戦です。

「生体実験によって大量の細菌を製造した七三一部隊は、その細菌を、浙江省の寧波、金華、衢州、湖南省の常徳、浙贛鉄道沿線に撒いた。その中国最大の被害地」としてその村のことが記されてあったのです。

のぞきこむ顔

その村の名は崇山村（すうざんそん）。中国浙江省義烏市江湾郷崇山村と言います。

一九九一年の夏、私たちはその村を訪ねました。私たち、というのは、私が制作した映画『語られなかった戦争・侵略』の上映運動をともにすすめていた宮城の糟

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbo

川良谷さん、南京大虐殺事件を追究していた共同通信の竹田昌弘さん、そして毒ガス問題を追い続けていた広島中国放送の尾崎祈美子さんと私の四人です。この四人は、あとでわかったのですが、崇山村はもちろん細菌戦の被害現地に調査に入った初めての日本人でした。崇山村の村人にとっても、あのとき――あのときとは一九四二年、日本兵がこの村へ侵入したとき――以来初めて見る日本人となりました。

「細菌戦」という厳しい歴史事実と初めて向きあうことになったその日のことは、私にとって忘れられない日となりました。まずこの章では、その日のことを時間を追ってふり返ってみたいと思います。

その日、真夏の太陽が照りつけるなか、私たちは浙江省の省都・杭州市から列車で崇山村へ向かいました。鉄道の名は浙贛鉄道。かつて日本軍がこの沿線に細菌を撒いた鉄道です。約四時間で義烏（ぎう）に到着。その日は義烏市のホテルに宿泊。翌朝、義烏市内から中国側が用意してくれたマイクロバスで崇山村へ向かいました。中国側とは、私たちの受け入れ機関の浙江省人民対外友好協会です。半官半民の団

体で通訳もそこの職員で二七歳の青年・褚文傑さんです。

義烏市内から南へ向かい、街並みが途切れてから二〇分も進むと、ちょうど畑のなかにぽっかりと浮かんだ島のように崇山村の集落が見えてきます。

車がだんだん村に近づくにつれ、村の入口近くに黒ぐろと人だかりがしていることがわかりました。それが次第に大きくなり、村の入り口付近に着いたときには、車が前進できないほどに人があふれているのです。

村の役人たちが懸命に道をつくってくれるのですが、なかなか前進できません。ようやく入口に着いたのですが、今度は取り囲む村人たちでなかなか下車できないのです。やっとの思いで下車すると、ものすごい人たちに囲まれて先へ歩けません。

「一体何があったんですか？　まさか私たちを歓迎するためにこんなに大勢の人が出てきたわけじゃないでしょ？」

通訳の褚さんに尋ねたのですが褚さんも首をかしげるばかりです。

とにもかくにも道をつくって村のなかへ入りますが、今度は、子どもたちや若者たちが私たちを取り囲み、何やら叫んでいるのです。そして、途中から気がついた

のですが、彼らが私たちの顔をのぞきこんで、同じようなことを言っているのです。前からも横からも若者たちは、私たちの顔をのぞきこむのです。その視線は決して〝歓迎〟のそれではないことはすぐわかりました。

今までも私はいくつかの取材現場で、多くの中国人にとりかこまれ身動きできない状態になってしまうことがありましたが、この日は異様でした。彼らに笑みはなく、どの眼も冷たく光っているように感じられたのでした。

「一体何があったんですか」

私の想像を超えたことが今この村で起きている、そう察した私は褚さんに再度尋ねました。

「……」

褚さんは顔を少しくもらせ首を横に振っただけでした。その表情は明らかに何かを悟っているようでした。

片時も忘れたことはない

村のなかに進んだ私たちは「祠堂跡」に案内され、村で以前から細菌戦被害を調べていた王達さんの説明を受けました。

「ここには、私たちの祖先を祭った大きなお堂があったんです。三〇部屋あり、木造でできた立派なお堂でした。

ところが一九四二年の秋、日本軍のペスト攻撃で村人たちが地獄の苦しみを味わっている最中、今度は陸上から日本兵がこの村へ侵入し、あちこちに放火し焼いてしまったのです。

そのとき、村人たちは『ペストの検査』と言われて村のはずれの広場に集められました。集められた村人は、動けないようにまわりを機関銃をもった日本兵にとり囲まれたのです。そうして家に誰もいなくなったあいだに日本兵は村に火を放ちました。ここにあった祠堂もそのときに最初に燃やされました。今残っているのはこ

の台座だけです。この台座は、あのときの災難を今に伝えています」。こう語ったあと「私たちは、片時もあのときのことを忘れたことはありません」とつけ加えました。

その後、焼きうちされた家の跡、村人が集められた広場、そして侵入してきた日本兵が村人たちを使って人体実験をおこなったという林山寺に案内されました。

林山寺は、村の集落から西北へ田畑をぬけて約三〇分、小高い丘の上にあります。周辺には集落は何もありません。遠方から寺を見ると、ちょうど低い雲の上に鎮座しているように見えます。

「この寺は、明代に建立され乾隆帝の時代に再建された由緒ある天台宗のお寺です。日本軍は、崇山村でペストが大流行しているときにここへやって来て、崇山村からペストにかかった人を運び人体実験をやったんです。この仏さまたちが見守るなかでです。腹を裂いたり、手足をもぎとったりしたんです。

今日の午後、ここへ連れてこられて危うく逃亡して助かった張菊蓮さんに会っていただきますので話を聞いてください」

うながされるまま私たちは、丘を降り、林山寺を後にしたのですが、一〇〇人を超える村人たちは、ここでも私たちをとりかこんではなしませんでした。

日本人を見るのもいやだ

午後、義烏市のホテルで昼食をとったあと、私たちは再び被害者の聞き取りのため崇山村へ向かいました。車は、崇山村の手前の江湾郷の役場で止まりました。当初予定していた崇山村の集会場では大勢の人が来てしまうので、村役場の会議室で行なうことになったのです。

私たちが会議室に入るとすでに被害者たち五人が座っていました。

部屋の雰囲気は、午前中の騒々しさとはうって変わって、ピーンと張り詰めた緊張感が漂っています。私たちにとっても、細菌戦の被害者たちと会うのは初めてですし、被害者たちにとってもあのとき以来、初めて会う日本人でした。

あとでわかったことですが、被害者たちは異口同音に、日本人の私たちと会うこ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbo